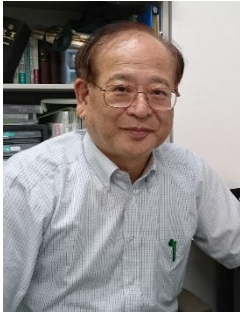




パリアン16年の歴史(4) ボランティア

医療法人社団パリアン理事長
川越 厚



1973年東京大学医学部卒業。茨城県立中央病院産婦人科医長、白十字診療所在宅ホスピス部長などを経て、1994年より賛育会病院長を務め、緩和ケア病棟を立上げる。2000年6月、クリニック開業と同時に、在宅ケア支援グループ“パリアン”を設立。

講座を修了した者だけが ボランティア活動できる

「ボランティアはホスピスの宝」であるが、ボランティア組織をホスピスの中に抱えるには、相応の負担がホスピスにかかってくる。そのために、姉妹ホスピス「ホスピスハワイ」では常勤のホスピスコーディネーターを置いている。

パリアンがボランティア養成講座を開講したのは、創立1年後の2001年。その維持はパリアンの不変の目標と考えてきた。ボランティアは専門職スタッフではないので、自分の生活ペースにあわせて自由に活動すればよいという考え方もあるが、パリアンのボランティアはチームの一員として専門職と協働し、責任を持って自律的に活動している。

とは言え、ボランティアがパリアンで活動するためには、チームの哲学、ケアの方針や具体的なケアの方法を専門職と同じように理解する必要がある。そのため、ボランティア入門講座の修了者のみが、パリアンでボランティアとして活動できる。ボランティア教育には新人ボランティアを対象とした入門講座と、既に活動しているボランティア対象のステップアップ講座とがある。

死に逝く人のケアに関わるホスピスボランティアには、一定の条件が求められる。ボランティア講座を受講することの他、以下の条件を満たさなければならない(「パリアンボランティア手帳」より)。心

身ともに健康であること、患者・家族・自分の個人情報を守れること、チーム活動ができること、他の人の価値観を大切にすることができ自分の価値観を押し付けないこと、時間を守れること、などがその条件である。また、親しい家族が亡くなってから1年未満の方はボランティアとして登録できない。

ボランティアコーディネーターのもと、 ボランティアは多岐にわたる活動をしている

パリアンのボランティアには患者宅を訪問する“訪問ボランティア”(2002年末開始)、患者の命日に遺族へ手書きで命日カードを書く“命日カードボランティア”(2001年開始)、故人の一周忌に行うメモルの集いを企画・運営する“メモルの集い(遺族の会)ボランティア”(2001年開始)、事務的な仕事を行う“事務ボランティア”、患者へのクリスマスプレゼントなどを準備する“手作りボランティア”など、その活動は多岐にわたる。毎週金曜日の昼に行われるデイホスピスを担当する“デイホスピスボランティア”(2003年開始、現在は「サロン・ド・パリアン(がんサロン)」ボランティア)は食事づくり、患者や家族との話、さらに季節行事の企画実行などを行っている。

ボランティアコーディネーターは、専門職ではないボランティアをチームの中に組み込み、自由意志で自分の都合のつく時間だけ活動するボランティアを束ねて、ケアを担う人としてチームに溶け込ませる働きを行っている。またボランティア活動がチームの理念から逸脱しないよう、常に見守り指導する必要がある。

このような働きをするボランティアコーディネーターをパリアンでは比較的早い時期(2004年)から置いており、現在は看護部長が兼任しているが、将来的には専門職としての採用、育成を考えている。

ラジオ NIKKEI 『大人のラヂオ』誌上配信

ゲスト：日野原重明（聖路加国際病院名誉院長）

川越厚医師が出演している番組（2017 年 4 月 28 日放送）を抜粋してお届けします。改めて紹介するまでもなく、日野原重明先生は予防医学や終末期医療の普及推進など、日本の医療に多大な貢献をされた医師。先生のご自宅を訪ねた川越医師に、若き日の病気のことや淡いロマンスなど、これまであまり知られていないエピソードを語ってくださいました。※「大人のラヂオ」ラジオ NIKKEI 第 1 毎週金曜日 11:35～12:30、毎週土曜日 20:30～21:25（再放送）。放送後は <http://www.radionikkei.jp/otona/> で聴くこともできます。

▼番組は日野原重明先生と川越厚医師のデュエットから始まった。

日野原 ♪ラーラーラ、ラーラーラ…♪

川越 ♪小さなかごに花をいれ、さびしい人に…♪

川越 いい歌ですねー。

日野原 この歌を私はね、幼稚園の先生から教えられてねー。

川越 百年くらい前の話ですね。

▼日野原先生は昨年 10 月、初の自叙伝『僕は頑固な子どもだった』（株式会社ハルメク刊）を上梓された。自叙伝を書いた動機がプロローグにある。

——105 歳でも、わからないこと未知のことはある。それに挑戦するために今、あるがままの私の姿を語り始めようと思う——

司会 日野原重明先生は 1911 年（明治 44 年）、牧師の家庭で六人兄弟の二男としてお生まれになりました。重明ですから「しーちゃん」と呼ばれて本当に健やかに育ったと書かれております。

▼ところが 1933 年、京都大学医学部 1 年（22 歳）のとき、人生の大きな転換点となる病に見舞われる。

日野原 友だちとマキノ高原（滋賀県）のスキー場に行ったときに、何か体に熱がある感じがありましてね、体温を測ったところ 39 度くらいあって、これはスキーどころじゃないと…。肺結核以外にはないとあれこれ思案していたら、両親がいる広島で療養したらどうかと勧められたのです。

▼日野原先生はお父様が務めておられた広島女学院の院長館の 2 階の 1 室で、絶対安静の生活を始める。

日野原 左の肋膜に溜まった水を取ってもらったり湿布をしたりしました。夜も湿布をしなきゃならないので、母が私のベッドの下の板の間に寝て、3 時間ごとに湿布を取り換えてくれた。それから長い 1 年でありましてね、母の私への療養というものを忘れることはできないのです。

▼8 か月の療養で、ある程度病状が回復した日野原先生は、山口県の虹ヶ浜にある結核療養所へ移る。

日野原 家族が「Mさんの住いの近くで療養したらどうか」ということでね。僕はその頃、文学青年だったの。毎日詩を作ったりして海岸で過ごしたので

す。Mさんの夫人は私に心を寄せているように思っていて、私も彼女を心の中に持ったというロマンティックな詩を書いて、小説も書いたの。

川越 お父様に「お前、恋しているな」とズバツと言われたとこの本に書いてありましたが、そのM先生の奥様のことをずっと密かに思ってたんでしょうか？

日野原 そうです。

川越 そのことは誰も知らないんじゃないですか？

日野原 知らない。父が詩を見てね、これは相当深刻な恋愛の詩だということを言われた時にアーンと思ったのですね。

川越 病気をしながらの、20 代の青年の、人間・日野原重明という姿を見ることができて、ほほえましく親しみを感じることができます。かなり先生も本気だったようですね。

司会 日野原先生、おちゃめな面もあり、純粋な面もあり、音楽もなさり、詩も書き、という理想的な方じゃないですか？

川越 後輩から見ると、高い山が目の前に立ちはだかかっていて、どんなに頑張っても乗り越えられない、そういう大きな存在ですね。僕は 105 年の人生の中で、先生を形作ったものは 2 つの大きな事件だろうと思うのです。一つは病、一つはよど号ハイジャック事件。そこでは「死」というものに向き合った。僕はこれが大きかったと思うのですね。僕も 39 歳のときに大腸がんになって、そのときは死を考えた。今まで何をやってきたのだろう、何のために生きているのだろうか、そんなことを問うのです。先生にも同じことが起こったんじゃないか。そこで自分の生き方を変える。そのことに自叙伝を読みながら感銘を受けたのです。

※日野原先生が朝日新聞の別刷り『be』に連載されている「105 歳・私の証 あるがまま行く」で、本ページの対談のことを執筆されました（4 月 29 日）。さらに、川越医師のご両親との広島での家族ぐるみの交流や、聖路加にまつわる人の輪の不思議にも触れられています。

ハワイ、メルボルンから、姉妹ホスピススタッフ来訪

サロン・ド・パリアンで 患者さんやスタッフと交流

パリアンは2006年に海外の2つのホスピスと姉妹提携を結び、スタッフの相互研修や共同研究を行ったり、地域の方へ向けた講演会を開催したりしてきました。

5月19日(金)に、その姉妹ホスピスである、Banksia Palliative Care Service (オーストラリア・メルボルン市)より Julie Paul さん(Executive Officer)と Tim Paul さん(Community Liaison Coordinator)、Hospice Hawaii (ハワイ州)より森田亜紀さん(Bereavement Coordinator)がいらっしやいました。

まずは毎週金曜日に開催しているサロン・ド・パリアン(がんサロン)で、患者さんやスタッフと共にボランティアによる手作りのお料理を囲んで、楽しい交流のひとつを過ごしました。会の最後にはボランティアとスタッフがピアノ、ハーモニカ、リコーダーで伴奏をして、全員で"SUKIYAKI SONG(上を向いて歩こう)"を歌いました。



▲ポールさんを真ん中に右がジュリーさん、左が森田さん



▲患者さん・スタッフを交えて料理を囲んで交流

3施設で独居患者の 在宅緩和ケアを共同研究

次に、パリアンと姉妹ホスピスとの3つの施設で今後取り組みたいと考えている共同研究についてのミーティングを行いました。テーマは独居のがん患者の在宅ホスピス緩和ケアに関することです。

各施設の国ではどこでも今後一層の高齢化が進むことが予測されており、特に日本は65歳以上の人口の割合が全体の約29%(2020年)、約32%(2030年)と、他国(米国・豪州では約16%(2020年)、約19%(2030年))より高くなるのが国立社会保障・人口問題研究所による推計値として出ています。これに伴って一人暮らしの高齢者も増え、家での療養を希望するがん患者さんが一人暮らし、というケースも多くなることが見込まれます。

一人暮らしのがん患者さんでも、どのような状況であれば在宅医療を始めることができるのか、さらにそのまま家で安心して過ごし続けるためにはどのようなケアがよいのか。各施設の許可が得られれば研究を始め、それぞれのケアプログラムやこれまでの実績を元に詳細な分析をして、超高齢社会においてもより質の高い在宅ホスピス緩和ケアが広がるような提言ができればと考えています。

「家族のケア」について ホスピスハワイ・森田さんが講演

夕方の勉強会では森田さんに「ホスピスにおける家族のケア」についてお話いただきました。米国のホスピスケアプログラムでは家族ケア・遺族ケアが必須となっておりますが、日本の現在の制度にはありません。森田さんにはBereavement Coordinator(死別のコーディネーター)としての役割やケアの内容について教えていただき、ホスピスケアとして大事なポイントをお話いただきました。

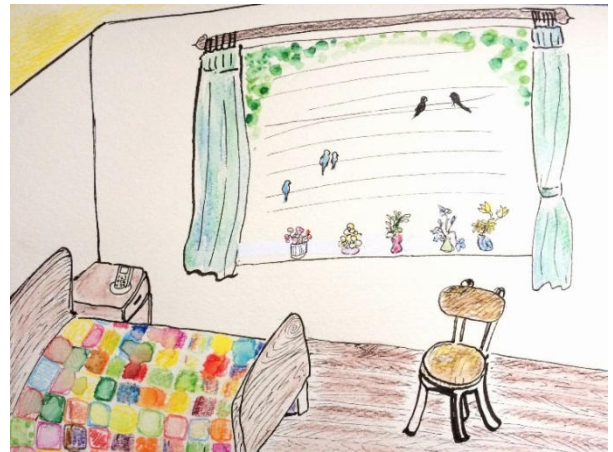
森田さんからは帰国後に「皆さんとお会いすることでどれだけ心のこもったケアを提供されているかが手にとるようにわかりました」と書かれたお手紙をいただきました。

各国の医療制度は異なりますが、より質が高いケアを目指す気持ちは同じです。今後も姉妹ホスピスとしてお互いに学び合い、交流を続けていきます。

「小さな宿泊所」の改修に着手します

『パリアン通信』でも幾度かご案内しましたが、「小さな宿泊所」の改修工事を6月から始めます。「小さな宿泊所」は現在、研修室となっている1階に2部屋の個室を設け、それぞれに介護ベッドやキャビネット、壁掛けテレビなどを備えます。窓外には鉢植えの樹木や花を配し、できる限り病室の雰囲気を出した、くつろげる部屋にする予定です。

入室いただいた患者さんのケアには、医師や看護師、ヘルパーのほかパリアンのボランティアも参加します。在宅ケアの中、一息入れたい方や一人暮らしの方のための小さな支援スペース「小さな宿泊所」は9月オープン予定です。



▲部屋のイメージイラスト

新スタッフ紹介



美濃口健治(医師) 訪問診療
外来診療

昭和大学医学部卒業
総合診療科 呼吸器科 アレルギー科

高齢であり全身状態が良くないため、先進医療が受けられない癌になった父親と母親に対して、人生の最期を穏やかに苦しまずに迎えて欲しいと願い、息子および医師の立場から人の最期の医療

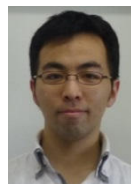
について真剣に考えました。

そんな中、川越厚先生に出逢え、先生の考え方と高度な医療技術に感銘を受け、ホスピスという愛の医療に携わることを決意しました。これからはパリアンの一員となれることに誇りを持ち、終末期癌患者様のため全力を尽くす覚悟で頑張りますので宜しくお願い致します。



齊藤哲也(医師) 外来診療
訪問診療

東京大学医学部卒業
(独)地域医療機能推進機構
東京新宿メディカルセンター



春山輝亘(医師) 訪問診療

帝京大学医学部卒業
帝京大学医学部附属病院腫瘍内科



齊藤美恵(訪問看護師)

父を自宅で看取った経験から、いつかは在宅ホスピスに携わりたいと思い続けてきました。当時の私はPCU(緩和ケア病棟)で看護師をしていましたが、例えば療養するのに最適ではないとしても、人が最期を迎える環境としてPCUは、自宅には到底かなわないと思い知らされました。

随分遠回りしてしまいましたが、この度、ようやくその願いが叶いました。人生の終わりに「これでよかった」と思っていただけのような看護を行えればと思っています。



村川 奨(訪問看護師)

5年間がん専門病院で勤務し、多くのがん患者さんを自宅へ送り出していく中で、自宅でうまく生活できているのか、退院後の生活に思いを馳せながら日々働いていました。最期までその人らしく過ごすことができる自宅での生活を支えたいという思いが日に日に強くなり、パリアンへの入職を希望しました。看護師としても人としてもまだまだ未熟ですが、パリアンのスタッフや患者さんとそのご家族との関わりの中で成長していけたらと思います。よろしく申し上げます。

スタッフ紹介



看取りの医療にかかわり続けたい 「訪問看護パリアン」訪問看護師(リーダー) 平岩 奏

パリアンの訪問看護師は現在 10 名いますが、私は3名いるリーダーの一人です。リーダーは医師の往診や訪問看護師のスケジュール調整をしたり、訪問看護後にあがってくる報告や相談にアドバイスしたりすることが主な役割です。

私自身は、現在3人の在宅患者さんのケアに担当看護師として携わっています。がんの患者さんには週4回医療者が訪問することになっていて、そのうちの1回は医師の往診なので、私たちはそれぞれの方の訪問看護に週3回伺っています。ご自宅では、疼痛や症状の緩和などの医療処置、療養上の生活ケアなどを、医師の指示のもとで行います。

日常の訪問看護のほかに、緊急当番という夜間対応(17時～翌日9時)があつて、これは2日単位(月・火、水・木、金～日)でローテーションされます。担当日はパリアンの近くにある宿泊所に泊まって待機し、緊急電話が入ると、看護師自身が状況を判断して対応することになっています。

私は、看護師になって20年ですが、パリアンでは5年目(2013年入職)になりました。その前は国立がんセンターで12年間、がん患者さんの看護にあたっていました。

一般的な看護とパリアンでの看護の大きな違いは、末期がんに特化しているのだから亡くなるまでの期間が短く、対応にスピードが要求される点ですね。

前もって患者さん・ご家族への対応の準備をしておくことがとても重要です。

パリアンでは、他の職種とチームを組んで在宅ケアをすることもありますが、やはり、末期の患者さんなので、介護的なことより医療的な介入が多くなります。そのため、他組織の方たちには、患者さんの希望とパリアンの理念のもとにケアの方向付けを伝えて、チームを調整していく役割を担う場面も多いですね。

パリアンの看護では、医療的対応はもちろんですが、患者さんに寄り添って、一緒に悲しみ、一緒に喜ぶといった支え方をしていますので、患者さんが亡くなられた時には当然、心を揺さぶられます。でも、良い意味で経験を積んできたからでしょうか、最近は感情をコントロールできるようになってきたのかなと思っています。

メンバーの支えも大きいですね。訪問から戻ってみんなの顔を見るとホッとしますし、悩みを共感してもらえるので、うまく気持ちをリセットできているのだと思います。

名前は「かなで」と読むのですが、歌も楽器もできるわけではありません。両親は「奏」にある「成し遂げる」という意味を込めたようなので、これからも患者さんやご家族とともに学びながら、看取りの医療にかかわり続けたいと思っています。

在宅ホスピスボランティア入門講座を開催

第25回在宅ホスピスボランティア入門講座を、4月15日(土曜日)にパリアン1階の研修室で開催しました。

この講座は、在宅ホスピスボランティアの基礎を学んでいただき、在宅ホスピスケアチームのスタッフの一員として、死に近づく人を支え、家族の力になっていただくための学習の場です。受講されたのは8名の方々でした。

最初に川越厚医師が「在宅ホスピスケア」につい

での講義を行い、次いでパリアンのボランティアが活動の内容について説明しました。

その後、受講生とボランティアがともに昼食をとりながら懇談し、ボランティア同志の絆を深めました。

在宅ホスピスボランティア
入門講座



ボランティアグループ パリアン

▲当日配布された
入門講座のテキスト

曾根原 穹先生をボランティアが訪問しました

曾根原穹（そねはらたかし）先生（日本基督教団の引退牧師）には2005年3月から8年間、パリアンチャップレンとして貴重な働きをしていただきました。

私とは個人的に50年以上の付き合いがあり、穏やかな人柄で今風に言えば天然キャラ、日々輝きを増す頭髪をお互いにさすりながら、無事を確かめてきました。わがパリアンではアイドル的な存在でした。先生の姿が見えなくなったのを皆、大変寂しく思っていました。

先生のご自宅（神奈川県津久井湖畔）をボランティアとともに訪問したのは、去る4月21日（土曜日）。先生のご自宅から湖のほとりまで総勢12名で散歩し、散り掛かる桜を愛でながら旧交を温めつつ、用意したお弁当に皆で舌鼓を打ちました。

今回の訪問の最大の収穫は、先生の悠々自適の豊かな老いに触れることができたこと。私たちも幸せの余韻に浸りながら、帰途につきました。

（川越厚 記）



▲ご自宅で歓談、旧交を温めました



▲談笑する曾根原先生と川越厚医師

訪問ボランティア

温かい部屋 ボランティアグループパリアン・中村景子



「また会えたね」と嬉しそうな笑顔でいつも私達を迎えてくれるYさん。「来てくれてありがとう、自分の家の様にして」と気遣ってくれる。初めは散歩や買い物に出かけたがその後は部屋で過ごすようになった。手足をさすったりしながらおしゃべりを楽しんだ。話がはずみ「あらもうこんな時間よ」と言われることもしばしば。

ある日、癌が治ったという友達の話をしていた時、Yさんが「いいなあ治って」とそっと言った。私達は何も言えない。Yさんの心の中の思いにそっと寄り添うことしか出来ない。

4月、ちょうど訪問の日がYさんの誕生日だった。お寿司とケーキでお祝いしようと嬉しそうに話していたが、当日Yさんは食べることが出来ない。それでも手拍子を取りながら歌を歌う笑顔のYさん。抱き合っておめでとうを言った。

桜の頃、Yさんの部屋には桜が飾られていた。日当りのいいその部屋は優しい思いと温かさが溢れていた。

「さよなら」を言う前にYさんは旅立たれた。



ボランティア活動予定

- ・手作りボランティア(毎月第1月曜日13時～)6月5日・7月10日
- ・サロン・ド・パリアン(毎週金曜日10時15分～)6月2日・9日・16日・30日(23日はお休み)
7月7日・14日・21日・28日
- ・訪問ボランティアミーティング 開催日未定
- ・命日カードボランティア(偶数月第3木曜日10時30分～)6月15日
- ・土曜会(毎月第3土曜日)

「事務ボランティア」改め「土曜会」にしました。ボランティアの事務を担うことはもちろん、在宅ホスピスボランティアの在り方や在宅ホスピスの在り方等について学び、意見交換をする場です。次回：6月24日10時30分～12時



▲玄関の花飾り(芝田葉子さん提供)

※ボランティア活動日は変更されることがあります。
そのときは各リーダーから連絡いたします。

パリアンスタッフ講演予定

講演者	開催日時	会	演題	会場
川越 厚	6月15日	広島県在宅保健福祉活動者の会 講演	がん患者の在宅緩和ケア ー相談外来での問題症例ー	広島国保会館(広島市)
川越 厚	6月21日	慶應義塾大学 看護医療学部 講義	在宅ホスピス緩和ケア	慶應義塾大学信濃町キャンパス (新宿区)
川越 厚	7月30日	臨床宗教者プロジェクト (仮称) 発会記念講演会	老いを生き、死を迎えるということ	日本基督教団洛南教会(京都市)

■フェイスブック(<https://www.facebook.com/hospice.pallium>)でも講演予定を随時紹介しています。

■川越厚医師出演番組

ラジオNIKKEIのホームページで、川越厚医師が出演した番組をオンデマンドで聴くことができます。

●大人のラヂオ

(ラジオNIKKEI 第1金曜日11時35分～12時30分) <http://www.radionikkei.jp/otona/>

●日曜患者学校 <http://www.radionikkei.jp/inochi/>

パリアン実習予定

実習日	大学・学部	実習内容	人数
5月15～5月26日 5月29～6月9日	東京有明医療大学 看護学部 (2グループ)	在宅ケア実習	9名
5月15～6月16日	東京医科歯科大学大学院	がん看護専門看護師教育課程 在宅ケア・緩和ケア看護学実習	1名
7月24～7月28日	東京大学医学部 5年	公衆衛生学実習 (在宅でのホスピス緩和ケア)	4名
8月21～8月25日	帝京大学医学部 5年	公衆衛生学実習 (終末期医療ー在宅ホスピスケア)	4名